

古墳時代地域社会の動態

—横手盆地の古墳時代遺跡群を理解するために—

青山 博樹

1 はじめに

古墳時代の開始とともに、東北南部（宮城県大崎平野と山形県山形盆地以南）は南関東や北陸などからの人の移動を含む影響のもとに、古墳時代社会が成立する。

平面形が方形の竪穴住居によって集落を営み、周溝墓などの小規模墳からなる墓域を造営し、水田稲作を生業の基盤とする農耕社会であり、西日本の弥生土器に系譜をたどれる土師器をもちい、鉄器（ふんだんとは言えないものの）が普及する。いくつかの集落からなる地域集団をたばねる首長層が農耕祭祀を司り、その死に際して大型の古墳に手厚く埋葬する社会である。首長層は、大和王権を中心としたネットワークによって政治的あるいは宗教的に結びつくことで、文化だけではなく政治的にも紐帯した一つの社会が九州から東北南部に広がる。すなわち、日本列島に初めて形づくられた広域の政治的なまとまりの北縁は、古墳時代には東北南部にあったことになる。

古墳時代に併行する時期（以下、古墳時代併行期）の東北北部には古墳時代社会は成立しなかったものの、その遺跡や遺物が点的に分布するほか、北海道からその分布域を広げて南下した続縄文文化の遺跡が知られている。ただし、いずれも数は多くなく、二つの文化のはざまにあってどのような社会や文化が広がっていたのか、その具体的な様相については未解明の部分が多い。

このようななか、横手市域では複数の古墳時代の遺跡が確認されており、古墳時代社会が成立しなかった東北北部にあって古墳時代の遺跡が集中する地域の一つである。

小文では、これら横手市域における古墳時代の遺跡群について、東北南部の古墳時代社会の集落や古墳の動態と比較し、また、東北北部にあってやはり古墳文化の遺跡群が確認されている宮城県北部や岩手県域の遺跡群との比較を行うことで、そのあり方や性格についての理解を試みたい。

2 古墳時代地域社会の動態

まず、古墳時代社会の北縁部にある仙台平野とその周辺（宮城県域）の遺跡群の動態を概観する。横手市域の遺跡群と比較するのであれば山形県域との比較も必要であるが、課題としたい。

動態の概要を述べれば、古墳の規模と遺跡数は前期がもっとも大きく多く、以後、遺跡数はしだい

に減少する。ふたたび増加に転じるのは終末期以降のことである（青山 2019）。

遺跡数が減少する要因についてはよくはわかっていないが、後期に遺跡数が減少することや古墳築造が低調となる現象は、仙台平野周辺だけでなく日本列島の他の地域でもしばしば指摘され、自然科学的な分析によって気候の寒冷化が指摘されること、同時期の文献史料に寒冷な気候を示唆する記事がみられるなど、日本列島における遺跡数の減少の要因を気候変動に求める意見がある（新納 2014）。

宮城県域においては、遺跡数の減少が始まるのは中期で、とくに北縁の大崎平野で顕著である。ついで後期に仙台平野でも遺跡数が大幅に減少することは、その背景に気候の寒冷化があることを示唆する。

3 古墳分布域北側の様相

前述のように、東北北部には古墳時代社会は成立せず、古墳文化や続縄文文化の小規模な遺跡が確認されている一方、古墳文化と同じ内容をもった遺跡群が形成されている地域がいくつか知られている。これらの遺跡群は、古墳時代を通じて存続するのではなく、比較的短期間のうちに終焉する。

その一つは、岩手県の奥州市域（旧水沢市・胆沢町域）で、最北の前方後円墳として知られる角塚古墳（前方後円墳、45m）、方形の区画溝をめぐらせる中半入遺跡のほか、いくつかの集落遺跡が確認されており、これらの遺跡が集中して一つの遺跡群を形成する。もともと規模を拡大するのは中期で、角塚古墳を築造するにいたるものの、後期には遺跡の数が大きく減少する。

もう一つは、宮城県北部の栗原市域で、前期の環濠集落である入の沢遺跡、伊治城跡下層で確認された方形区画遺構などが知られており、伊治城の方形区画溝跡からは古墳時代前期の土師器とともに続縄文土器が出土している。当遺跡群では前期に盛行し、中期以降に位置づけられる遺跡は少ない。

この他、岩手県盛岡市周辺には、続縄文土器の分布が集中することが指摘されている（黒須他 1998）。盛岡市永福寺山遺跡では、続縄文文化の土壌墓群とその周辺から続縄文土器とともに土師器が出土し、鉄製の鎌などが出土している。

これらの遺跡群は、いずれも北上川とこれに並行する交通路（現在の国道4号線、旧奥州街道）と、太平洋沿岸から北上山地を越え、さらに北上盆地を横断して奥羽山脈を越える交通路との交点に位置している。すなわち、いずれも遠隔地どうしを東西と南北に結ぶルートの交点にある。このことは、これらの遺跡群の性格や役割を考える視点の一つとなる（青山 2014・2015）。

4 横手市域の古墳時代遺跡群

東北南部の地域社会の動態との対比から注意されるのは、横手市域や奥州市域の遺跡群が盛行する古墳時代中期は、東北南部においてはむしろ遺跡数が減少して分布範囲を縮小することである。このことは、古墳時代社会の拡大によってこれら二つの遺跡群が出現したのではなく、その背景に何か別な意図や目的のあることを示唆している。

横手市域の古墳時代遺跡群を考えるうえでとくに注意されるのは、奥州市域の遺跡群である。角塚

古墳を中心とするこの遺跡群は、前述のように、中期ににわかに遺跡数を増やし、後期にはその数を急激に減らす。つまり、中期の遺構が多く確認されている横手市域の遺跡群とほぼ同じ動向をもって消長する遺跡群であり、これら二つの遺跡群の消長が連動している可能性がある。

いま一つ注意されるのは、これら二つの遺跡群が奥羽山脈を越えるルートによって結ばれていることである。さらに、横手盆地を横断して笹森丘陵を西に越えると、そこにやはり古墳文化と続縄文文化の遺物を出土したことで知られる由利本荘市（旧西目町）の宮崎遺跡が存在する。宮崎遺跡で出土しているのもやはり続縄文土器と中期の土器を含む古墳時代の土器である（小松 1987、納谷 2001）。

日本海に面した宮崎遺跡、横手市域の遺跡群、奥州市域の遺跡群は、一本の交通路によって結ばれているとあっていい。あるいは、太平洋岸にも未確認の遺跡があるのかもしれない。

このような視点から、これら古墳時代社会の北側に形成された遺跡群の性格や役割を読み取ることができるのではなかろうか。すなわちこれらの遺跡は、東北の北部と南部、そして日本海と太平洋を結ぶルート、古墳文化と続縄文文化のあいだを結ぶ陸路・海路の途上にあつて、その交流・交易の中継地としての役割を担ったのではないだろうか。

とすれば、これらの遺跡群は、続縄文文化を含む北方との交易を目的として古墳時代社会のいずれかの地域から進出した可能性が示唆される。

くわえて注意されるのは、出土する土器である。横手市域の遺跡群から出土する土器群は、いずれも山形県域以南の日本海側に分布する土器と同じ特徴をもつものに対し、奥州市域の遺跡群の土器は太平洋側の土器の特徴をもつ。また、角塚古墳の埴輪は、仙台平野の埴輪と類似することが指摘されている（藤沢 2002）。このことは、日本海側と太平洋側の集団がそれぞれに横手市域と奥州市域の遺跡群の経営にあたったことを示唆する。

5 一本杉遺跡の大型住居跡

一本杉遺跡では、発掘調査によって10×10mの規模をもつ大型の住居跡が複数確認されている。東北南部の古墳時代集落では、この規模の住居跡はもっとも大型の部類に属し、確認例は多くない。また、このような大型の住居跡が確認されるのは数十軒の住居跡からなる大規模集落である場合がほとんどである。このような大型住居の存在は、一本杉遺跡のどのような性格を示しているのだろうか。

解釈の一つは、一本杉遺跡が大規模集落である可能性である。しかし、調査の所見からすれば、一本杉遺跡が大規模集落である可能性はほとんどないといってよい。

ここで比較したいのは、岩手県北上市に所在する猫谷地遺跡（斎藤他 1982）である。この猫谷地遺跡の周辺にはほかに古墳時代の集落が確認されておらず、現状では猫谷地遺跡がぽつんとあるのみだが、やはり北上盆地を南北に縦断するルートと東西に横断するルートの交点に位置する。横手市域とも奥羽山脈を越えるルートによって結ばれている。発掘調査では、古墳時代中期と同終末期の複数の住居跡が確認されている。この遺跡で注意されるのは終末期の集落跡で、小規模な集落であるにも関わらず、一本杉遺跡と同様に大型の住居跡が含まれている。

このような大型の住居跡の存在は、これらの遺跡の性格を考えるうえで考慮しなければならない点の一つである。

6 さいごに

古代史の研究を参照すれば、道と道が交わる地点のことを「チマタ（衢・巷・街）」といった。チマタとは、すなわちミチマタである。チマタの研究を参照すると、考古資料には遺らないその具体的な活動内容を垣間みることができる。すなわちチマタには、定期的に市がたち、四方から参集した人々によって歌垣が催された、とされる。歌垣とは、男女が互いに歌を掛け合い、ついには…、という年中行事である。情報の交換、富をもたらす交易、そしてこのような交歓もまた、チマタが人をよぶ要因だったのかもしれない。

古代には、太平洋側の三つの遺跡群にそれぞれ、伊治城、胆沢城、紫波城が建設される。それは、これらの遺跡群の所在地が、古代にあってもやはり要衝と認識されたことを示している。とくに、律令国家と蝦夷とのあいだで戦われた三十八年戦争の末、これらの遺跡群とまったく同じ地点にそれぞれ城が建設されたことは、律令国家によるこの戦争の目的の何であったかをよく示している。

一方、日本海側はこのような状況とは様相を異にする。すなわち、古代に建設される秋田城と払田柵は、いずれも古墳時代の遺跡群の所在地とは異なる地点にある。律令国家と蝦夷の関係が、太平洋側と日本海側で異なっていることがしばしば指摘されるが、このような遺跡群のあり方にも、目立った戦争の記録がない日本海側のあり方が示されているのかもしれない。

引用・参考文献

- 青山博樹 2014 「列島東部の交流拠点とその性格」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学研究会
- 青山博樹 2015 「チマタ・歌垣・古墳」『列島東部における弥生後期の変革』六一書房
- 青山博樹 2019 「古墳時代地域社会の動態—仙台平野とその周辺—」『古墳分布北縁域における地域間交流解明のための実証的研究』福島大学行政政策学類
- 黒須靖之他 1998 「角塚古墳以前の北上川流域」『最北の前方後円墳』胆沢町・胆沢町教育委員会
- 小松正夫 1987 『宮崎遺跡発掘調査報告書』西目町教育委員会
- 斎藤 淳他 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XVI（猫谷地遺跡） 岩手県文化財調査報告書第71集 岩手県教育委員会
- 島田祐悦他 2018 『一本杉遺跡』横手市文化財調査報告第44集 横手市教育委員会
- 納谷信広 2001 「西目町宮崎遺跡出土の土師器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
- 新納 泉 2014 「6世紀前半の環境変動を考える」『考古学研究』60-4 考古学研究会
- 藤沢 敦 2002 「東北地方の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第6号 埴輪研究会

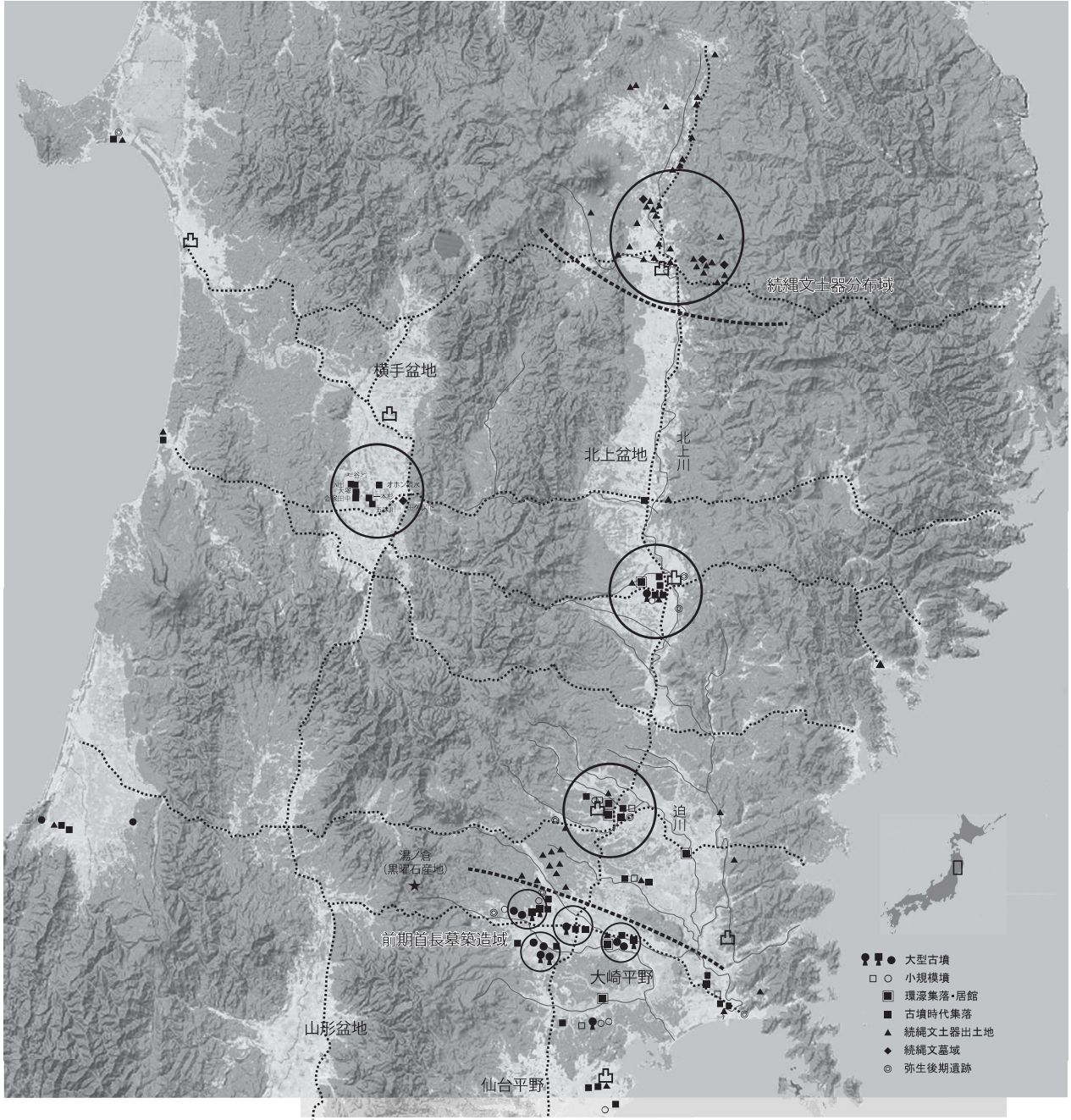


図 弥生後期～古墳時代における境界領域の遺跡